

自然誌 だより

Natural history



三重自然誌の会情報誌 145号

2025年 9月

保色山（熊野市）に風力発電計画

5月18日実施の「三重貝なかまー保色山採集会」に同行しました。保色山は、熊野市の北部に位置し、標高1028mあり市域では最も高い山です。一帯は国有林のため、調査には営林署への入林届が必要で、届けが受理されると林道ゲートの鍵を借りることができます。山頂一帯にはブナ天然林が残っており、生物多様性保全の観点からも重要な場所なのですが、これまであまり調べられていませんでした。そこで、少しでもデータを得ようと今回の調査に便乗したのですが、行ってびっくり山頂に新しい鉄塔が建っているではないですか。当然周辺の樹木は伐採され、登山記念のプレート等も付近にうち捨てられていました。近くに小さな掲示板があり、風力発電施設建設のための調査で、三重県知事が許可を出していることが記載されていました。風車は一つできると次々と増殖することは青山高原や獅子ヶ岳の例が示しています。生きもの達はもちろん、熊野市民も一部の方々以外には賛同する人はいないと思われますので、風力会社にとっても無駄に資金を投入することなく、早期に断念することが賢明な判断と考えます。



写真 左；ブナ天然林は山頂北側にあり巨木も多い（2025年5月18日撮影）、右上；山頂一帯は伐採され鉄塔が建ち登山記念プレート等は打ち捨てられていたのでとりあえず一箇所にまとめた（同）、右下；山頂直下に設置したセンサーカメラにはカモシカの姿もあった（2025年5月19日撮影）。

（清水 善吉：松阪市日丘町 1386-17）

タイワンタケクマバチに刺される!

上 田 利 彦

事の発端は2024年6月30日、庭木の剪定をした際、いつも軒下に置いてある竹製のさらいを使って片付けをしていたとき、柄を握っている右手の小指にハチに刺されたような激しい痛みを感じました。さらいの柄と手の間に何も挟まるものはないはずなので一体なんぞや?と手元を見たら、さらいの柄に直径5mmほどの穴が開いているのを確認しました。この穴からハチが出てきて刺されたのか?なんとなく羽音が聞こえた気もしたので穴の周りをラップで囲みハッチアウトしてくるだろうその何者かを確認することにしました。

すると8月10日(実際はこの日まで確認していませんでした)に穴から頭部を出した状態で死んでいるハチらしきものが確認できました。全身を確認すべくピンセットで慎重につまみだそうと試みましたが、すでに乾燥しきっており、崩れてしまいました。何とか調べた結果、ミツバチ科クマバチ属のタイワンタケクマバチ *Xylocopa (Biluna) tranquebarorum tranquebarorum* であると思われました。その名の示す通り台湾や中国大陸南部からインドに自然分布し、日本では2006年に豊田市で初めてその侵入が報告された移入種で、日本での生息は中部・近畿・北陸付近に拡がっているそうです。枯れた竹に営巣するとあり、竹ぼうきや竹垣、さらにはゴムホースにまで穴をあけた事例もあるそうです。

良い写真が撮れなかったので報告を見送っていたところ、今年の6月7日ふと気づくと昨年と同じさらいの下にプラスと25mmほどの白い幼虫が落ちており(写真1)、さらいの柄には新しい穴が確認できました。なぜ落ちたのかは不明でしたが、とりあえず幼虫は穴に戻してみました。すると翌日また同じように落下しています。複数の幼虫が成長し淘汰されるのかもと思いながら、再度戻しておきました。その後7月9日、昨年と同じように剪定した枝を片付けようとさらいを持ち出しました、ただ去年と違うのは巣穴付近を持つと刺されるからと、意識してそこを避けて持って作業をしていました。そのはずなのに、また同じように強烈な痛みを今度は左手中指に感じました、“また、やられた～、なんでやねん!”と半ばほくそ笑み、半分自虐しながら見ると、昨年の穴と今年の穴を見間違っていたことに気付きました。

それにしても、そんなに都合よくなぜ刺せるのかと思いながら、改めて観察すると、柄に振動を与えると穴の中から毒針のついた黒い腹部後端＝尻をのぞかせ、わずかに振り動かす行為が見られました(写真2)。そこに何かが当たれば刺すぞ!といわんばかりにです。その後、竹の中を何とか観察してやろうと穴を拡げる際にも奥の方から出てきていったん外を伺ってから、穴の入り口で尻を振る同様の行動が見られました。穴を拡げると中を覗いて観察する前にそそくさと出てきて、今回は簡単に捕まえることができました。捕獲個体は立派な成体で、そういえばここ数日クマバチが飛んでいるのを見かけており(写真3)、この個体がさらいの柄を巣穴として出入りしていたのではないかと思われました。痛い思いはしましたが、本種の生息と巧みな生態が確認できた次第です。

ちなみに、刺されたときは無防備な状態で刺されるからなかなか痛いのですが、長くは続かず、作業を続けていたらすぐ忘れていました、ただ腫れは数時間続き、指を曲げにくい状況でした。皆さんも竹ぼうきや竹のさらいを使われるときはお気をつけ下さい。



写真1 フラスとともに落下した幼虫
(2025.6.30)



写真2 巣穴から尻を出してゆっくり
振動させるハチ (2025.7.9)



写真3 ささげの花の蜜を吸う成虫

(うえだ としひこ：津市久居一色町 176-1)

大きな、大きなシロチョウ？

中西 元 男

「見たことのない蝶を採ったので引き取ってほしい」という連絡と共に（虫屋でないヒトの“珍しい”とか“見たことのない”はたいていロクでもないもので、無視していたところ）、標本持参で清水善吉氏が拙宅にやってきた。「図鑑でみるとエゾシロチョウ」の中身を確認めると、アカボシゴマダラ春型早だ。人為で持ち込まれ関東から広がった特定外来種の中国大陸原産名義タイプ *Hestina assimilis* は、その和名に反し春型では後翅に赤斑を表さない。ので、エゾシロチョウ似と言っていえないこともない。

三重県でこそまだ確認例は少ないが、隣県愛知ではもうとっくにあちこち広がっているようだ。採集データは愛知県なので「いらんワ」と思った（口にも出したと思う）が、「まあまあ」と置いて行かれてしまった。だがしかし、しかたなく展翅してみると・・・（写真1）。国蝶にして日本最大のタテハチョウ種、オオムラサキに匹敵する迫力、薄くクリームがかった白色地色に黒い翅脈線もなかなかシックで美しく、標本箱のお飾りとしては悪くない。

種 *H.assimilis* は、日本では鹿児島県の奄美大島、徳之島と周辺の小島嶼に亜種 *shirakii* が分布している。種の世界分布など知るすべもなかった昆虫少年時代には「奄美まで行くとゴマダラチョウでも赤い斑紋のある種類がいるのか！さすが亜熱帯」と感心していたものだ。だから、自分の居所三重県よりはるか北方まで展開して、持ち込まれた先で燎原の炎のごとく分布拡大する蝶が、奄美特産遺存的固有狭域分布にみえる *ssp.shirakii* と同一種とは認めがたく（DNA とかではなく、自然の中で行動、暮らす生き物として）、移入“種”はアカ「ホ」シゴマダラ、奄美のものを従来通りアカ「ボ」シゴマダラと区別して呼び慣わしている。なので、この“種”の三重県初記録を報告する際、タイトルをうっかり「特定外来種アカホシゴマダラ三重県に侵入」（本誌141号）としてしまったのだが、報告というものは他人に対して行うのだから、これは適切でなかった。

ところで、奄美特産であつたはずのアカボシゴマダラが近年沖縄本島でも発生し始めている、という。これに先立ち日本では沖縄本島と周辺小島嶼古宇利島特産だったフタオチョウが奄美で採れだした。沖縄県指定天然記念物で採集規制のかかる本種だが、鹿児島県でなら天下御免と考えた誰かが放蝶したとも言われている。アカボシゴマダラもそれに味を占めた愉快犯の可能性がありそうという。ウラナミアカシジミの紀伊半島亜種を愛知県知多半島に放蝶したと、得意そうに公表するヒトもいて、こういうモラル・ハザードだらけだと蝶屋をやっているのがイヤになってしまう。

●標本データ

アカボシゴマダラ：愛知県瀬戸市幸町 2025年5月30日
清水善吉・採集，中西元男・所蔵（写真1）。

オオムラサキ：津市美杉町大洞山 2022年7月23日 中西元男・採集所蔵（写真1）。

（なかにし もとお：松阪市新町959）



写真1 上；アカボシゴマダラ，下；オオムラサキ

モンクモバチがゲホウグモを狩る

塩 崎 哲 哉

2025年8月12日9時45分頃のことです。御浜町下市木にある自宅の庭に出ると、足元でハチが盛んに穴を掘っているのに気づきました（写真1）。穴の周りにはかなりの土くれがたまっており、しばらく前から穴掘りを続けていたものと思われます。クモバチの仲間だろうと付近を調べてみると、穴から30cmほど離れたところにゲホウグモが横たわっていました。すでに毒針で麻酔をかけられ、ぐったりとしています。カメラを用意し観察を続けました。

ハチは頭から穴の中にもぐり、しばらくすると前脚で土くれを抱えるように後ずさりをしながら穴の外に土くれをかきだしています。それを繰り返しながらも、時折クモのことが気になるのか、素早くクモに駆け寄り、その無事を確認するとすぐに穴の所に戻り、穴掘りを続けていました。

観察を初めて20分ほどたった時、穴から出てきたハチは、前脚でひとしきり顔を撫でまわした後、クモの所に駆け寄り、クモの第Ⅲ脚の付け根の所を咬んで後ずさりに穴の方に向かってクモを運び始めました（写真2）。穴から10cmほどのところまで来ると、いったんクモをそこに置き、穴に戻って中に入っていました。穴の中の様子を最後に点検したのでしょうか。すぐに出て来てクモの所に戻り、同じようにクモを咬んで穴の所まで運び、そのまま後ずさりにクモを一気に穴の中に引きずり込みました（写真3）。卵を産み付けている様子は観察できませんが、クモはこの後ハチの幼虫の餌となる運命です。15秒ほどするとハチは穴の入り口付近まで出てきて、触角を穴の壁に打ち付けるようなしぐさを見せました。15秒ほどそのような行動を見せた後、穴から顔を出し、さらに15秒ほど前脚で触角をぬぐうようなしぐさを見せました。その後、さらに身を乗り出し、前脚で回りにある土くれを穴の中にかき込み始めました。しばらくかき込んだ後、今度は穴の中で体を上下に震わせるようなしぐさを見せます（写真4）。おそらくお尻の先でかき込んだ土くれを突き固めているのだと思います。その後も土くれをかき込んで突き固めるという動作を繰り返していました。かき込んだ土くれの中に小さな石が混じっていた時には、それを口でくわえて、穴の外にとりだす様子も見られました。

残念ながら、この後所用があったため、観察はここまでとし、ハチを採集しました。そのあと、穴の中のクモを掘り出しましたが、掘り出す際にとれてしまったのか、ハチの卵を確認することはできませんでした。



写真1 穴を掘るモンクモバチ



写真2 脚の付け根を加えて後ずさりで穴に運ぶ



写真3 穴の中に引きずり込む



写真4 体を上下に震わせて土を押し固める



写真5 木の瘤に擬態するゲホウグモ

見つけ出したのか、興味の引かれるところです。

後で調べてみると、ハチはクモバチ科のモンクモバチ *Batozonellus maculifrons* でした。コガネグモやナガコガネグモなどの造網性のクモを狩るということです。ゲホウグモも造網性のクモですので、その点は納得ですが、前者は昼間網を張りその中にとまっていますが、ゲホウグモは夜間に網を張り、昼間は木の枝などに、まるで木の瘤のように擬態した姿でとまっており（写真5）、それをどのようにして

（しおざき てつや：御浜町下市木2338-1）

カモシカの情報を集めています

清水 善吉

ニホンカモシカ（以下、カモシカ）は偶蹄目ウシ科に属する日本固有種で（写真1）、国の特別天然記念物に指定されています。指定獣ですので、文化庁による生息状況調査（通常調査と特別調査）が継続的に実施されており、通常調査は県内で20人余りの調査員に委嘱して毎年、特別調査は調査会社に委託して6年おきに実施しています。

今年は、特別調査の年にあたっており、今年度末には報告書が刊行される予定です。この報告書の何冊かは手元にもあるのですが、県内のカモシカの減少傾向を指摘する内容となっているのが気になっていました。というのも、調査で野外に



写真1 カモシカ（2024年10月11日、大台町大杉_大台林道）

出た時にカモシカに遭遇する機会が増えているように感じており、この感触は私だけではないと思います。こんな話をすると、イヤイヤ増え過ぎたシカに追い出されて周辺部での目撃機会が増えているだけで、本来の生息地である山地—これも本当か疑問—では激減していると専門家には説明されるのですが、シカが増えているのは里も同じはずで、どうも説得力に欠けるように思っています。また、ツキノワグマ狙いで山中に設置した自動撮影カメラにもカモシカはけっこうな頻度で写っています。結局のところ調査不足、データが少ないなかで個体数推定をするからではないかと判断していました。

このようなことを吹聴していたら、特別調査に会で協力をと県教委の担当者から連絡があり、説明を聞かせてもらいました。そんなにややこしい作業を要するわけではなさそうなので引き受けることにして、このたび皆様をお願いする次第です。

今回の特別調査に必要なデータは2018年以降の情報ということで、基本的にはいつ、どこで、なにを目撃したかです。いつは年月日、どこでは市町+大字名と位置のわかる地図、なにをかは成獣1頭とか成獣1+幼獣1とか溜糞（100粒以下、100-200粒、200粒以上）等です。あわせて写真の有無もお知らせください。対象範囲は三重を中心とした隣接県（和歌山、奈良、滋賀）で、募集期間は本年10月末日迄です。送り先は本会事務局 Shimizuzenkich @ gf7.so-net.ne.jp、電話090-9262-4665。

なお、得られた情報はカモシカを主とする獣類の保護管理の目的以外に使用することはありません、とのことです。県内のカモシカの実態をより正確に把握するために、皆様のご協力をお願いいたします。

（しみず ぜんきち：松阪市日丘町1386-17）

池ノ谷のモリアオガエルー2025

宮 島 美 栄

昨今の気候変動の影響を、紀伊半島最大のモリアオガエルの繁殖池、池ノ谷（多気郡大台町）で、カエル達の産卵数を通して観察を続けて5年。昨年までは2021年（観察を始めた最初の年）をピークに減少傾向であった卵数は、今年（2025年）これまでになく大量の卵塊数を確認するに至った。

確かに今春は、寒かった、20世紀の頃のように寒かった。特に2月は「如月（着更着）」という昔の月の読み方がしっくり来るほど冷えていた。そして、春先は池の水は干上がっていて、菜種梅雨あるいは梅雨の走りの雨で池になる、というのも以前通り。

4月2日は未だ水が無い池（写真1）。5月2日水が溜まりだす（写真2）。5月28日、晴れ、23℃、さわやか涼しい。卵塊数299個。6月4日、晴れ、21℃、さわやか涼しい。卵塊数は予想に反して104個と大幅に減少。しかしながら、多数のカエルの姿を確認する（写真3）。そして、6月15日、雨のち晴れ、20℃、蒸し暑くなるが、池ノ谷は涼しい。なんと卵塊数は1137個（写真4）。1か所に5～6個の卵が重なりあって付き、それが池のほとりの主だった木の枝に鈴生り状態、今年は池の脇にある林道の木にまで卵が観られた。

なぜこれほど大量の卵が出現したのか。私が観察し始めた2021年はいよいよ異常気象も「通常」になっていく気配が漂い、毎年夏は猛暑日の記録が更新され、四季の中から「春」と「秋」は消えてしまうのではと危惧する風潮が勢いを増すなか、今春はふと昔に戻ったような、一瞬だったがそんな錯覚を起こすような春だった。人間の私でもそう思うのだ、カエル達はずっともっと敏感に感じていたかもしれない。

もし、それが今年的大量卵の訳なのだとしたら、やはり私たちにできることは、できるだけ山を削らない、木を切らない、川をコンクリートで固めない、それぐらいしかできないが、それができれば劇的に変わっていくだろう、しかし、その「それぐらい」の事がどれぐらい難しいか、ここ半世紀以上に渡る私たち現代社会の営みの



写真1 水のない池（2025年4月2日）



写真2 水の溜まりだした池（同5月2日）



写真3 モリアオガエル（同6月4日）



写真4 鈴なり状態の卵塊（同6月15日）

在り方、方向性が如実に物語っている。

カエルたちの試練は続くだろう、そして来年の卵数はまた激減することが予想できる。なぜなら、今年の梅雨が西日本では早々に明けてしまって（東海地方は7月4日頃）、6月末から夏本番の猛暑が続いている。大量の卵も池の水がなくなってしまうとオタマジャクシたちは生存できない、千個以上あった卵もその半分は死んでしまうだろう。そうなれば来年の個体数は半減、当然卵も半減という予想。実際はどうか。来年以降もカエルたちの異常気象、気候変動に対抗する手段を観察していきたい。

今年のデータを今までの4年間のデータと比較すると（表1）、確かに2月の気温の低さは際立っており、2022年の早春と似ている。そして、5・6月はほぼ毎年平年と同じだ。いや、今年に関しては平年より気温は2度も上昇しているが、これは早い梅雨明けが関係してそう。しかしながら気温に関しては明らかに上昇傾向であると思う、そして今年も気象現象の極端さは変わらない、その点については着実に進行（悪い方へ）している。この「気象現象の極端さ」こそが明らかに昔と違う変化だと思う。また、来年も継続して観察を続けていく。

表1 紀伊長島の気象データと池ノ谷におけるモリアオガエルの産卵状況

年	月	1	2	3	4	5	6
平均値	気 温	6.2	6.9	9.8	14.3	18.3	21.6
	降 水 量	70.9	80	164.3	207.3	253.4	312.9
2021	気 温	6.4	8.7	12.5	14.6	18.3	21.8
	降 水 量	76.5	136	406.5	310	280	231
産卵状況 初確認日：5/18, 30個 ピーク日：6/5 最終報告数：656個							
2022	気 温	5.9	5.8	11.3	16	18.5	22.3
	降 水 量	20.5	25.5	154	279	214.5	310
産卵状況 初確認日：5/16, 30個 ピーク日：6/7 最終報告数：613個							
2023	気 温	6.3	7.9	12.3	15.7	18.8	22.4
	降 水 量	25.5	26	196	187.5	228	570
産卵状況 初確認日：5/22, 15個 ピーク日：6/14 最終報告数：428個							
2024	気 温	7.4	9.4	9.9	16.6	18.6	22.3
	降 水 量	152.5	195	306.5	234.5	217.5	307
産卵状況 初確認日：5/31, 240個 ピーク日：6/26 最終報告数：406個							
2025	気 温	6.6	5.4	11.3	15.3	18.8	23.5
	降 水 量	29	20	126.5	113	403	194
産卵状況 初確認日：5/28, 299個 ピーク日：6/15 最終報告数：1137個							

（みやじま みえ：大台町上三瀬52-1）

日本オオサンショウウオの会名張大会のご案内

日本オオサンショウウオの会は、この動物にあくなき興味を抱く人たちの集まりで、その方向性は様々、ベクトルの広い団体です。年に一度の大会が、今年は名張市で開催されますので、この機会に足をお運びください。いろんな意味でのサプライズ参加してのお楽しみーを保証します。参加申し込み期限が過ぎていきますので、夜間観察会等、定員のある行事への申込はむづかしいと思いますが、報告会等への参加については席に余裕があれば可能ですので名張市に問い合わせてください。詳細は同封案内をご覧ください。（清水善吉）

大型テントウムシ2種，河川敷の桑に

篠 木 善 重

6月初旬、和歌山県で開催された紀伊半島三県フィールドワーク交流会に参加した帰り道、国道42号線が横切る松阪市の櫛田川中流域の河川敷に立ち寄った。左岸の河川敷を3kmほど歩き回ったが、近年急激に拡大が続くヨシの大群落に阻まれ、なかなか岸边にたどり着けない。

庄町地域でヨシ群落の中、1本の大きな桑の木に熟した黒い果実を見つけ、摘み取ろうとし近づく先客がいた。大きなテントウムシだ。体長は11mmもある。カメノコテントウ *Aiolocaria hexaspilota* である（写真1）。この種はヤナギハムシやクルミハムシなどの幼虫を捕食することが知られているが（初宿1999）、桑の実に飛来することは知られていないと思われる。桑につくクワハムシ幼虫でも狙ってきたのだろうか。ところが、ネット検索をしてもクワハムシの幼虫を食べるという確実な情報は得られなかった。

すぐ近くの葉裏に止まるハラグロオオテントウ *Callicaria superba* も見つけた（写真2）。オレンジ色の翅に14個の黒点を持ち、こちらも同等サイズだ。この種は桑につくクワキジラミを食べることが知られている（初宿1999）。三重県産のテントウムシの中で最大級の2種が（体長が10mmを超える種は2種のみ）、同日・同場所の同じ桑の木で、発見されたのである。2種ともに私にとって初見であり、初採集初撮影である。三重自然誌の会（2018）によれば、この2種とも松阪市から記録されたことはないで、これが松阪市初記録と思われる。カメノコテントウの標本は、2ヶ月後には赤色部分が少し黒っぽくなってきている。



写真1 桑の実にカメノコテントウ



写真2 桑の葉裏にハラグロオオテントウ

記録

1. コウチュウ目テントウムシ科 カメノコテントウ *Aiolocaria hexaspilota* : 松阪市庄町櫛田川河川敷，1頭，8-VI. 2025，篠木採集。
2. コウチュウ目テントウムシ科 ハラグロオオテントウ *Callicaria superba* : 松阪市庄町櫛田川河川敷，1頭，8-VI. 2025，篠木採集。

文献

三重自然誌の会2018. みえ生物誌-昆虫 I（甲虫）. 三重自然誌の会，松阪，749pp.
初宿成彦1999. ミニガイド No.16大阪のテントウムシ. 大阪市立自然史博物館，大阪，39pp.

（しのぎ よししげ：津市河芸町中別保2230-1）

編集後記

残酷暑のなかでの編集作業でした。愛好家のモラル低下を指摘する記事がありましたが、これは各々の価値観の問題でもあり、一方にとってはトンデモ行為であっても方やは善行とっていたり（自戒を込めて）。次号は12月発行予定です（善）。

自然誌だより145号 Mie Natural History Research Group News, No.145

発行日 2025年9月5日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）
e-mail:shimizuzenkichi@gf77.so-net.ne.jp